

# 大正前期中学校の学校紛擾と 生徒文化・学校文化の変容

## 佐賀中学校同盟休校（大正5年）の事例

太田 拓 紀\*

## Secondary School Riots and Changes in School and Student Cultures during the Early Taisho Era

### A Case Study of the Saga Secondary School “Strike” of 1916

Hiroki OTA

キーワード：学校紛擾、生徒文化、学校文化、旧制中学校

#### 1. はじめに

##### 1.1. 問題の所在

本稿は佐賀中学校の同盟休校事件（大正5年）を事例に、大正前期中学校における学校紛擾の実態とその背景について、生徒文化と学校文化の観点から考察するものである。

学校紛擾（学校騒動）とは、戦前期に主に生徒らが特定の要求を掲げ、同盟休校などを手段に教員や学校、行政当局に反発し、学校教育を一時停滞させた一連の事件である。それは生徒間、教師間の対立を契機とする場合もあったが、大半は教師・生徒間の軋轢に端を発したという（寺崎 1971, 斎藤 1995, 岩木 2020 など）。紛擾の理由は、過度な指導や厳格な処分への反発、学校生活に対する不満、転任・退職等教員人事への抗議、教師の不祥事に対する怒りなど、多岐にわたっていた（太田 2019）。また、紛擾時における生徒の具体的な行動として、寺社・集会所での一斉立て籠もり、要求貫徹に向けた決議文・要求書の提出、卒業生・保護者との連携、世論の誘導を目論んだ報道機関への働きかけなどが見られたという（市山 2015, 太田 2017, 2018, 2021）。大規模化、長期間化した場合には、事態の収拾に知事が関与したり、警察が出動することもあった（太田 2021）。学校紛擾は戦前期を通じて断続的に発生したのであり、近代教育の負の遺産といえるかもしれない。

さて、学校紛擾は大正後期以降には高等教育機関でも頻発するが（伊藤 1999）、戦前を通じて最も多発したのは明治期の中等学校であった（寺崎 1971, 太田 2019）。実際、これまでの中等学校の紛擾研究も明治期を対象とするものが多い。それらの先行研究を概観すると、大きく2つのタイプに分類できると思われる。

まず一つは、雑誌記事・新聞記事等を資料に用いて、集合的事象として学校紛擾を把握し、かつ行政側の対応等を検討するものである。例えば、寺崎（1971）は『教育時論』の掲載記事から明治期学校紛擾の発生件数を集計し、紛擾を実証的に捉えようと試みた。佐藤（2005）は寺崎に依拠しながら、明治期を中心に文部省による紛擾対策の経過を論じている。また、斎藤（1995）は明治期中学校にお

---

\* 滋賀大学教育学部

ける紛擾の類型化を試みている。さらに、岩木（2020）は『教育時論』に基づいて明治期学校紛擾の言説分析を行っている。

研究のもう一つのタイプは、当事者の立場に依拠して学校紛擾の動向を具体的に検証しようとするケース・スタディである。太田（2016, 2018）は紛擾当事者の視点から、明治期学校紛擾の事例研究（沖縄中学校、盛岡中学校）を実施し、その背景を検証している。岩木（2020）の一部や木村（2021）でも個別事例から、主に紛擾の発生原因を追究している<sup>(1)</sup>。こうした事例研究は、とりあげた特定の事件が紛擾全体の性格をどの程度反映しているのかという、代表性の問題が常につきまとう。しかしながら、報道記事など外部の視点に基づき紛擾が検討される一つ目の研究群とは異なり、当事者の「日常生活世界」（Schütz und Luckmann 訳書 2015, p. 43）から、紛擾のリアリティに迫れるというメリットがある。

さて、中等学校の学校紛擾は、明治期ほどではないにせよ、大正期以降も頻発していたことが知られる（小野 2008、太田 2019）。この大正期の事例研究として、大正 10（1921）年水戸中学同盟休校を対象としたものがある（太田 2021）。当事件は校長の留任要求を掲げて生徒が立ち上がったもので、その背景として、大正後期の思想統制、校長を中心とする学校共同体の生成などが挙げられている。ただ、この事例では明治期紛擾の要因として指摘された、教育の制度化に伴って生じた学校内部での文化的軋轢（太田 2017, 2018）がほとんど確認できなかった。それは、大正期には中等教育の整備が進行しており、発展の過渡期であった明治期の事情とは異なるためと考えられる。また、周知のとおり、大正期は自由教育の思潮が広がりを見せていく（中野 1968 など）。このように、学校紛擾をめぐる状況は、大正期には新たな局面にさしかかっていたといえる。ただし、この時期を対象とする中等学校の事例研究は上記のみであり、紛擾の実際やその背景の解明が十分ではない。

以上をふまえ、本稿では佐賀中学校の同盟休校（大正 5 年）を事例に、大正前期中学校における学校紛擾の実際を明らかにした上で、発生した背景を検証する。その際、紛擾に影響を及ぼしたと想定される、当時の生徒文化や学校文化に着目する。本稿の成果により、大正期学校紛擾の性格の一端が解明されるとともに、当時の中学校の新たな文化的側面を明らかにできると考える。

## 1.2. 事例の性格と研究の資料・方法

大正 5（1916）年 1 月に発生した佐賀中学校同盟休校は、生徒が素行不良による退学処分を恐れて起こした事件である。具体的には、宿賃の支払いに窮した生徒が質屋にて質入れを行い、それが学校当局に咎められたことが端緒となっている。実質的に 2 日間で収束したが、一部暴力沙汰になったこと、生徒約 170 名が寺院に立て籠もったこと、生徒の説得に保護者を巻きこんだこと、学校が警察に介入を依頼したことなど、相応の展開をみせた紛擾でもあった。

そもそも佐賀中学校では、明治 21（1888）年の最初のストライキ以来、何度も同盟休校に見舞われている<sup>(2)</sup>。そのため、生徒や教員の回想でも、佐賀中学がいわば「ストライキ学校」であったことがしばしば言及されている<sup>(3)</sup>。本事件に対処した校長・千住武次郎も「佐賀中学と言えばストライキが盛んで、その名声（？）は遠く関東まできこえていたので、自分のようなものが往つても、果たしてうまく務め得られるであろうか」（千住 1957, p. 205）と、赴任当時（大正 2 年）を語っている。

しかし、学校史によれば、「本校の昔からの名物行事学校騒動はこの時代に入るや大正五年一部不良生徒の煽動により一度、而も短時間で解決されたものが起ったばかりで全くその跡を絶つに至った」（創立八十周年記念事業委員会編 1957, p. 315）とされる。つまり、本稿がとりあげる大正 5（1916）年の同盟休校は、「ストライキ学校」佐賀中学校の最後の紛擾であった。とすると、この学校紛擾はどのような性格をもっていたかという疑問とともに、それ以降はなぜ紛擾が生じなかったのかといった問いも浮かび上がってくる。この点も本稿の射程となる。

なお、本事例では、事件の収拾にあたった校長による紛擾顛末書が残っており、事件の詳細を把握できる。この資料を中心にして紛擾の実態を明らかにする。また、学校沿革史にはしばしば生徒文化や学校文化に関わる教員・生徒の回想が記されており<sup>(4)</sup>、こうした回想録も資料として活用する<sup>(5)</sup>。

さらに、その他の資料として、県視学による紛擾報告書、教員・生徒の手記、地元新聞記事等を用いている。なお、本稿はこれまでの事例研究（太田 2017、2018、2021）と同様、当事者の「主観的現実」（桜井 1983, p. 260）から紛擾の現実に向き合うものである。

## 2. 校長の顛末書にみる佐賀中学校同盟休校の実際

この大正 5 年の佐賀中学同盟休校はどのような契機で発生し、展開していったのだろうか。校長の千住武次郎は、大正 5（1916）年 1 月 25 日付けで事件の顛末書を県に提出している（『佐賀中学校 生徒同盟休校に関する顛末 具申』大正 5 年 1 月 25 日〔佐賀県公文書館所蔵〕、以下、『顛末書』）。この『顛末書』には事件の「原因」「経過及結末」が詳細に記されており、生徒と教員の具体的な動きを把握できる。この内容を軸に、同盟休校の実際を明らかにしていきたい<sup>(6)</sup>。なお、ことわりのない限り、以下 2.1～2.3 節の引用は『顛末書』に依拠している。

### 2.1. 立て籠もりまでの生徒と教員の動静

同盟休校の発端は、5 名の生徒が久留米旅行中の 1 月 6 日に宿賃の支払いに窮し、質屋に時計を質入れしたことにある。この件が学校側の知るところとなり、校長らは 1 月 18 日に「学生トシテ如何ハシキ行動」として叱責・指導を行った。そのうちの 2 名が「従前既ニ幾多ノ悪行アリ終ニ退校処分ノ免ルベカラザル」と退学を危惧し、「学校行政、職員ニ対スル不平」を口実に同盟休校を画策したという。彼らはその夜、市内の生徒に招集をかけ、これに応じた 3・4 年生 8 名と饅頭屋で具体的な計画を密議したという。

さて、翌日 19 日の朝 9 時、学校では主謀者ら 5 名の生徒が「竹刀ヲ振ヒ第三、四学年生徒ヲ脅迫シテ校門外ニ出デヨト叫ビ応ゼザル者ハ之ヲ乱打シ」と、3・4 年生を校外に追い立てて同盟休校への参加を強要した。このとき、主謀者の一人は「制止ニ出デタル職員ノ一名ニモ暴行ヲ加ヘ」たという。結局、3・4 年生の約 200 名が校門を出て、北に向かって逃走をはじめ<sup>(7)</sup>。校長は 3 名の教員にこれを追跡させた。途中の多布施川の土手で追いついた教員らは、主謀者に「二百万説諭ヲ加ヘ解散帰校ヲ命ゼシ」が、彼らは「頑トシテ聴カズ」であった。その後、生徒の団は学校の北約 10km の川上実相院に到着し、階上の一室で立て籠もりを開始する。到着した教員 2 名は主謀者 2 名を階下に呼び、再度説諭するも応ずる気配がないため、一度学校に引揚げている<sup>(8)</sup>。

午後 3 時半になると、千住校長は生徒の保証人（保護者）を学校に招集して事件を報告し、今後の対応について討議した。その結果、教員 4 名の引率のもと、保証人らが実相院を訪問する。彼らは面会を求めるも、生徒は再び拒否している。その後、保証人代表数名が生徒代表を階下に呼んで説諭したが、このときに「生徒側ヨリハ学校ニ対スル希望ヲ認メタル書面ヲ提出シテ階上ニ引上ゲタリ」。つまり、生徒らが学校への要望書を手渡している。さらに、生徒らに代表者 5 名を出すように要求するも、やはり応じなかった。逆に生徒らは「梯子ヲ撤シ軍歌ヲ高唱シテ喧噪至ラサルナシ」として、大いに騒ぎはじめたという。

### 2.2. 同盟休校理由書の内容

さて、このとき提出された「学校ニ対スル希望ヲ認メタル書面」は、翌日（1 月 20 日）の『佐賀新聞』にそのまま掲載されている。内容を確認しておこう。以下はその抜粋である。なお、一部の人名を〇〇、△△、□□等と伏せ字にしている。

#### 同盟休校の理由

一、警察方の干涉廃止並制裁会の再興 吾人は我校生徒中に不健全の分子を認めざるに非ず、さりとて是に対する警戒其の他に關し警察に其の任を委ぬる事は吾が校に威信なく且生徒間に自治の精神なきに似たり 故に制裁会の再興せんことを切望す  
聞くならく近時我が校生徒間に奢侈の風流行し本校の特色なりと称する上級下級生徒間の敬礼

行なれず且つ甚きに至りては婦女との関係ありと

- 一、処罰の不公平　こは其の任にある諸先生の知る所ならむ、処罰は教師の見たる人物成績に関し真に其の行為の如何よりて其の罪の当る所を定めず（中略）○○、△△、□□等敬礼をなさざるを名として年小なる下級生に制裁を加へたれども処罰なかりき　然るに●●、▲▲両人の■■■某に制裁を加へたる際処罰の如きは停学一週間なりき　■■■某の素行を見るに白粉を使用し婦女に関係する等宛然町家の遊治郎たり
- 一、組別の弊害－四五年　○○先生の如き、組により其の教授法試験の程度等を異にせり　是先生の生徒に対する同情心の発露ならむも生徒自身にとりては甚だ有難迷惑なる次第なり　又不幸丁組となれる者は失望落胆なしとせず
- 一、教授上欠点多し　前記○○及び△△□□先生等は今少し自己の教授法を改善せられむことを一、遠距離旅行を切望す　一日旅行は得る所唯疲労のみ知識を得所少し
- 一、教員生徒間意思疎通せず　発火演習運動会兎狩り等の年中行事只教師の思ふまゝにして毫も生徒の意見を容れず
- 一、教員不責任　吾人は千住校長、森、下村先生等の親切にて学識ある良教師を有す　然れども左の如き不責任なる教師を戴くを悲しむ（以下、略）（『佐賀新聞』大正5年1月20日3面）

以上の7項目を挙げて、指導処分や学校生活への不満を記し、特定の教師を名指しで批難している。この同盟休校理由書を起草した生徒は、後にその経緯を説明している。それによれば「二三の友人は私の書いた原稿をコピーして新聞記者に手交した」（筒井 1957, p. 126）と述べており、それによって翌日の新聞で報じられたことが分かる。このように決議文や要求書を新聞報道等に公表し、正当性を広く世間に訴えるのは、学校紛擾の典型的な手段であった（市山 2015）。当生徒は、理由書を執筆した際の事情を次のように記している。

事件のリーダー連は、自己弁明と世間に悪く思われ度くない為に、新聞に休校理由を発表した。勢い学校のやり方、教師の言動を非難せねば顔が立たなくなる。その理由書の起草をさせられたのが私であった。文芸部の理事に当選した直後であったので、指名されて、一生一度の不覚な仕事を引受けた。起草と言っても首領連の指示する事項を文章にしたにすぎないが、執筆の罪は大きい。翌日の各社の新聞に第三面に五段抜きで拙文が掲載された時は、半ば英雄的な自己満足の蔭に、空恐しさが潜んでいた。帰校後、主任のビーバ先生に告白して罪を待った。幸い白井、中村等諸先生の寛容で譴責だけで許されたが、精神的な処罰は今も受けている（筒井 1957, pp. 125-126）。

この起草者は、図らずも批難を浴びせることとなった教師に反省の弁を述べている。また、理由書「処罰の不公平」の項では、紛擾主謀者が実名で登場し、他生徒に制裁を加えた際の停学処分に対する不満が述べられている。つまり、この理由書は同盟休校に参加した生徒らの総意ではなく、主謀者が紛擾を正当化するための手段であったといえるだろう。

### 2.3. 同盟休校の終結と生徒への処分

さて、同盟休校の経過の確認に戻りたい。生徒はその後、佐賀市内の業者に弁当を発注し、蒲団を借り入れるなど、夜を徹して抗戦する構えを見せる（『佐賀新聞』大正5年1月20日3面）。その一方、手段を尽した保証人らは、ついに警察権に訴えることで意見が一致する。午後7時頃、川上実相院に警察官が到着した。しかし、「警官数名下ヨリ梯子ヲカケ階上ニ至リ説諭ヲ加ヘシモ却テ之ヲ罵詈訕ヲシ殆ント術ノ施スベキナシ」と、結局生徒らは警察の説得にも応じなかった。千住校長は状況報告を受けて知事官舎に赴き、県知事、警察部長、佐賀警察署長と会合し、やむを得ない場合は明朝に改めて警察権を借りることに決定した。

日付が変わって深夜午前1時半には、千住校長自らが人力車にて川上実相院を訪れ、1時間半もの



間、主謀者に解散の説得を行った。主謀者は一言も発しないため、30分の猶予を与えて返答するよう求めた。しかし、1時間経過後の午前4時になっても返事がなく、千住校長は「小職ノ命ヲ奉ゼザルノ意思ヲ明カニシタルヲ以テ終ニ不得已警察力ヲ用フルコトナレリ」と、警察に出動を要請した。

なお、「十九日ヨリ二十日早暁ニカケテ途中又ハ実相院ヨリ逃出シ帰レル者多数アリタリ」と、学校を出て以降、離脱した生徒が続出していたと記されている。ある生徒は「私はその時、多布施川の土手の所までついて行ったが、ストライキの理由が分らなくなって、ついて行くのがいやになり〇〇（引用者注：伏字）君と二人で離脱して学校に引き返した」（今泉 1967, p. 107）と回想している。

午前8時、警部補が巡査数名と実相院に到着した。結局、実力行使で主謀者ら5名を確保し、佐賀警察署へと連行していった。他の生徒も解散を命じられ、校長が引率して川上軌道にて帰校している。午前10時半に生徒らが中学に到着すると、校長は空腹を見越して生徒らに握飯を配っている。そして、生徒に取り調べを実施し、事件の真相を明らかにした上で、講堂にて千住校長が1時間ほど訓戒を行った。正午頃に生徒らは保証人に引き渡され、生徒らに一旦の登校停止を申し渡している。

引き続き、午後3時から職員会議を開き、主謀者4名を退学、共謀者1名を諭旨退学とする処分を決定した。また、他の生徒は譴責にとどめることとした。警察に連行された主謀者生徒らは、結局罪には問われず、厳重注意の上で午後6時に保護者に引渡されている（『佐賀新聞』大正5年1月21日、3面）。24日には同盟休校に参加した生徒を出校させ、3年生90名、4年生74名に譴責を言い渡した。これにて、一連の紛擾が終結を迎えることとなった。表は事件の経緯をまとめたものである。

### 3. 佐賀中学校同盟休校の背景

以上、校長の記録を中心に事件の内実を確認してきた。資料とした『顛末書』は、あくまでも校長の視点で記録されたものであり、生徒らは別の論理で動いていた可能性はある。とはいえ、「同盟休校理由書」には主謀者生徒の自己擁護が見え隠れしており、起草させられた生徒の回想をふまえると、基本的にはこの紛擾は、退学処分を恐れた生徒が他の生徒を強制的に巻き込んで惹起したものとみなせる。では、一部の強圧的な生徒の扇動で紛擾が生じるような、「ストライキ学校」佐賀中学の生徒文化とは、いったいどのようなものであったのだろうか。以下、明治期に遡って確認していきたい。

#### 3.1. 明治後期佐賀中学校の生徒文化

大正5（1916）年の同盟休校に教師として対処した下村湖人（本名：虎六郎、明治17〔1884〕－昭和30〔1955〕年）は、後に教養小説『次郎物語』で知られる文筆家でもあり、教員生活後は社会教育の実践者としても活躍した。下村は明治36年の佐賀中学卒業生であった。彼は明治30年代の在学時の生活について、『武張つた』と形容すればまだきこえはいいが、実は暴力と男色とでぬりつぶされた、ごわごわの、生臭いカンヴァス見たいなもの」（下村 1955a, p. 60）と振り返っている。また、当時の生徒間にみられた関係を次のように記している。

さて、そのころの佐賀中学は、上級生が全権をにぎっていました。そこで、日常の学校生活も先生が監督するというよりも、むしろ上級生が校規を維持するという名目で、下級生をよび集めては訓示をたれるといったふうでした。表向きには秩序とか規律とかいうことをしきりにいうのですが、その内容は上級生に対する“絶対服従”の一語につきます。それに反する者は、秩序を乱すとかで鉄拳制裁を加えるわけです。これには、学校へはいったとたん、なんと恐ろしいところへきたものだろうと、びっくりしました（下村 1955b, p. 39）。

このように、生徒間の厳格な上下関係を回顧する明治期の教員や生徒はひじょうに多い。明治39・40年に校長を勤めた三根円次郎も、「上級生の下級生に対する威力強大で、一面には不良生徒に警戒を加ふるの利があるが、又他面之か為めに多数生徒の受くる不利は少くなかつた」（佐賀県教育会編 1927,

表：佐賀中学校同盟休校（大正5年）の経過

1月6日	3・4年生5名が久留米への旅行中に宿賃に窮し、時計3個を質屋に入れて支払を行う。
1月18日	質入れが学校当局の知るところとなり、放課後彼らに対し監督教員と校長が叱責。このうち2名が従来の素行から退校処分となる可能性を危惧。同日夜、他の2名と共に謀して、市内の生徒を招集を呼びかける（多くは応ぜず）。集まった8名（4年4名・3年4名）と先の4名とで成美高女前の饅頭屋にて密議する。このとき、学校に対する種々の不満を挙げて同盟休校を計画。
1月19日	朝9時に主謀者ら生徒5名が通学生を校門で待ち構え、竹刀等を振り回して校外に出るように促し、同盟休校への参加を強制する。4年生の一部はこれに従わず、3・4年生間で乱闘となる。教職員が騒ぎに駆け付けると、5名のうち1名が教職員に暴行。3・4年生約170名が学校の北方およそ10kmの川上実相院に移動し始める。西川文一、横山一、下村虎六郎の3教師が生徒の団を追跡し、多布施川堤上で一度追いついて主謀者に解散・帰校を諭すが、生徒らは頑なに拒否。生徒の団はそのまま歩を進めて川上実相院に到着。階上の一室にて立て籠もりを開始。午後3時半、千住校長は生徒保証人（保護者）を学校に招集して事件を報告し、その処置について議論する。その後、教員4名（西川文一、大下盛、白井敏輔、小野市郎）の引率のもと、保証人が実相院に赴き、面会を求めるも生徒らは拒否。さらに、保証人代表数名が生徒代表数名を階下に呼んで説諭するも、生徒らは学校への要望書を提出して階上に引きあげる。午後7時頃、警察官が川上実相院に到着し、数名が梯子を架けて階上に上がり説諭するも、これを罵詈雑言して拒否。小野教諭より状況報告を受け、千住校長は知事官舎に赴き、知事、警察部長、佐賀警察署長と会合。やむを得ない場合は明朝に警察権を用いることを決定。
1月20日	午前1時半、千住校長が人力車で実相院を訪れ、1時間半もの間、主謀者に解散帰校の説得を続ける。30分の猶予を与えて返答するよう求めるが、1時間経過後の午前4時になっても返答なし。これにより、千住校長は警察に出動を要請。（出校以来のこれまでの過程で、逃亡し帰宅する生徒が多数あり。）午前8時、警部補が巡査数名と実相院に到着。主謀者ら5名を確保し、佐賀警察署に連行。他の生徒に解散を命じて、校長引率の下で川上軌道にて帰校。午前10時半、生徒らは学校到着。空腹のため生徒に握飯を与えた後、生徒の取り調べを行い、事件の真相を検証。その後、講堂にて千住校長が1時間ほど訓戒。続いて、保証人代表による訓戒があり、正午頃に生徒を保証人に引渡す。その際、指示があるまで登校停止を申し渡す。午後3時より6時半まで職員会議を開催。処分として主謀者4名に退校、共謀者1名に諭旨退学、その他一同には譴責を決定。主謀者生徒らは午後5時まで警察署にて取調を受けるものの、結局罪には問われず。午後6時、主謀者生徒らの保護者を警察署に呼び、嚴重注意の上で生徒を引き渡す。
1月21日	生徒5名の保証人を学校に召喚して、放校と諭旨退校を命ず。
1月24日	同盟休校に加担した生徒に出校を命じ、3年生90名、4年生74名に譴責を言い渡す。

『佐賀中学校 生徒同盟休校に関する顛末 具申』、『佐賀中学校 生徒騒擾に関する報告』（以上、佐賀県公文書館所蔵）、『佐賀新聞』大正5年1月20・21・22日各3面を参照して作成。

p. 104) と述べている。また、明治末に入学した生徒は、「たとえ一級違っても上級生と下級生との間には、いとも厳格なる長幼の序があって、上級生には必ず脱帽敬礼を義務づけられて居り、故意に欠礼でもしたら無論の事、若し気がつかずにウツカリ欠礼した場合にしても相手が悪かったら忽ち鉄拳制裁の憂目に会った」（杜 1957, p. 175）と振り返っている。別の生徒も「五年生は一年、二年、三年の各生徒を集め、学年別につきつぎ雨天体操場の板敷に荒砂を撒き、その上に下級生を正座させて“級会”と言う制裁会をするのです。実に凄いのだったが、学校も怪我人や病人が出ない限りこれを許した」（赤司 1977, p. 249）と、「制裁会」なる会の存在を示唆している<sup>(9)</sup>。つまり、当時の生徒にとって「上級生の権威といふものが立つて居た。学校の躰よりも、上級生の感化の方が大であつた」（福山重吉 1941, p. 87）のであった。

また、当時の生徒の間には2つのグループがあったとされる。「豪傑気取りで威張つて生徒間に幅を利かす一派と柔順でよく勉強するが生徒間には一向勢力のない一派とがあつた」、すなわち「豪傑派」と「優柔派」の二派である（佐賀県教育会編 1927, p. 106）。このうち、「豪傑派は自己の勢力を張るにつとめ、口実を校規の肅正、不良生の制裁に籍つた」（同上, p. 107）。先の下村は「優柔派」（「聖人組」<sup>(10)</sup>）であって、友人らと「誠友会」と称した会合に参加していたが、そこでは天下国家論の演説

やその内容批評を行っていた。ただ、「豪傑組」と正面から対決してけんかをするというようなやり方ではなく、その仲間だけがみずからを清くするという趣旨にそったもので、一種のひややかな抵抗でした」(下村 1955b, p. 39)。つまり、あくまで「聖人組」は当時の佐賀中学では異端であり(永杉 1974, p. 59)、生徒文化の中心は明治期まで粗暴の「豪傑組」にあった。

### 3.2. 「軍人養生学校」と学校紛擾

そうした「豪傑組」には軍人志望が多かったという(同上)。大正期のある卒業生は佐賀中学校を「軍人養生学校」(大武 1968, p. 168)と評しているが、伝統的に佐賀中学校は陸軍士官学校や海軍兵学校といった軍学校への進学者が顕著な学校であった。斉藤(1995, pp. 148-149)によれば、明治全年間を通じた佐賀中学卒業生総数 1860 名のうち、軍学校への進学は 279 名であり、6.6 人のうち 1 人という高い割合であった。また、明治後期(明治 33 年以降の 9 年間)陸軍士官学校の出身中学の内訳によると、佐賀中学は 84 名であり、成城学校(238 名)、山口中学(92 名)に続く全国 3 番手の学校であった(同上, pp. 149-150)。佐賀中学は陸軍内に強固な派閥をもっていた影響もあって、「大量の進学者を輩出していた中学」(同上, p. 150)であった。先掲の校長・三根によれば、「上級学校に志望する者甚だ多く、殊に陸海軍の如き余かが在勤当時は年々百名を越えた」(佐賀県教育会編 1927, p. 104)。さらに、ある卒業生は次のように記している。

…入学式とか卒業式とかには兵学校在学生、士官学校在学生が正装を整えて式場(講堂)正面の左側と右側に威儀を正して所謂綺羅星の如くズラリと並んだのは盛観だった。一種のデモンストレーションであつたのである。これを見るとやはり子供心にも心躍る思で、兵学校、士官学校への入学心をかき立てられたものである(大川内 1959, p. 11)。

このように、佐賀中学の軍学校への進学志向は、学校儀礼のなかでも焚きつけられていた<sup>(11)</sup>。また、軍縁故の郷土人団体「知新会」が佐賀中学生に軍学校への進学を支援していたという(烏田 2020, p. 15)。佐賀中学は確かに「軍人養生学校」といっても過言ではなかった。

学校紛擾との関係で整理すると、次のことを指摘できると思われる。上級生の権威が強く、粗野な佐賀中学の生徒文化は、とくに「豪傑組」の軍人志向によって増幅し、学校秩序への反抗に結びつきやすかったのではないか。明治期に佐賀中学で頻発した学校紛擾の背景には、こうした生徒文化の特徴が影響していたと推測される。

### 3.3. 大正期佐賀中学校の学校文化

しかしながら、大正期生徒の学校生活に関する回顧を見ると、厳格な上下関係はときおり登場するものの、明治期のようにあからさまな制裁や暴力への言及が少なくなっていく。代わって顕著になるのは、運動部に関する内容である。例えば、大正 10 年入学の生徒は「当時の佐中は、野球、庭球、柔剣道等、県内はもちろん九州大会でも度々優勝し、佐中の存在を天下に示していた」とし、「スポーツの第一線で活躍した者も、上級学校進学において優秀な成績を収め、全国的にも最難関と見られる学校へどんどん合格した」(松本 1967, p. 113)という。事実、大正後期にそれまで弱小であった野球部が九州中等学校野球大会で 3 度、庭球部は九州大会で 2 度優勝しており、「運動殊に野庭球に於て嶄然頭角を抜くに至つた」(佐賀県教育会編 1927, p. 126)とされる。校友会誌では生徒らが野球応援に熱を上げた思い出も詳細に語られている(西川 1941)。他にも大正期の生徒の回想には、兎狩、マラソン大会などの学校行事がしばしば登場する。例えば、「千住武次郎先生が新校長として御着任になつてから色々と刷新せられ年中行事の中にも面白い目新しいものがあつた。兎狩などは其尤なるものである」(福山善次 1941, p. 110)として、その苦労話が懐かしく述べられている。

大正 6 年の転入生徒によれば、「僕が佐中に転校した頃は千住先生の御薫陶よろしきを得て、校風も一新され、修学旅行中の乱闘やストライキの話などは唯口伝に聞くのみでした」(太田 1957, p. 129)。つまり、この時期には学校紛擾が生じる雰囲気が消えつつあった。図は佐賀中学校における懲戒によ



る退学処分者数の推移をみたものである。紛擾が生じた年に著しく上昇する指標ではあるが、相対的に大正中期には人数が落ち着いている。学校規範に逸脱するような、佐賀中学伝統の粗野な生徒文化が希薄化している証左のように思われる。

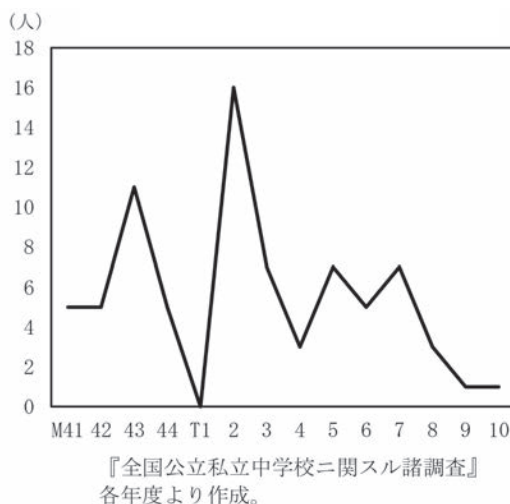
### 3.4. 校長・千住武次郎の学校改革

そうした変化を生み出したのが、先の回想にも触れられていた第13代校長の千住武次郎（明治3〔1870〕-昭和32〔1957〕年）とされる。千住は明治22（1889）年に佐賀中学を卒業後、第五高等学校、帝大文学部へと進み、その後は中等学校教員のキャリアを歩んだ。そして、大正2（1913）年9月に埼玉・粕壁中学校長から母校・佐賀中学の校長に赴任した。その人物像は「温厚寛厚で純潔謙虚、環境に対する洞察力も鋭かった」（佐賀県立佐賀西高等学校創立百周年記念事業委員会編 1977, p. 113）とされ、就任以降さまざまな改革を行っている。例えば、「フットボールを生徒に配給してグラウンドを走らせスポーツの奨励とグラウンドの雑草の繁茂防止につとめ、背振山で兎狩りを行うなど生徒の体位の向上に努力した」（同上）。こうして千住校長は「生徒たちの気持ちと若いエネルギーを荒れたストライキから次第にスポーツや学校行事に徐々に向けていった」（大園 2008, p. 219）という。また、赴任1年後には、教頭・教務主任をはじめ複数の教師を解雇し、指導力や学識に優れた教師を積極的に採用している（杜 1957, p. 188）。さらに、学級を成績順に組み替えるとともに、5年分の教育内容を4年までに終え、5年生の1年は上級学校への進学準備に充てるというように教育課程をつくりかえている（同上, p. 189）。大正中期は高等学校をはじめとする上級学校への受験競争が激化する時期であり（竹内 1997 など）、千住校長は受験準備に特化した教育体制を整えたといえる。結局、名校長とうたわれた千住校長の在職期間は、歴代で最も長い12年に及んだ。

### 3.5. 生徒文化・学校文化の変容と同盟休校の位置づけ

こうした生徒文化と学校文化の変化のなかで、大正5（1916）年の学校紛擾はどのように位置づけるのだろうか。この点から紛擾の背景について考察を試みたい。

大正5（1916）年の学校紛擾は、大正2（1913）年に赴任した千住校長が学校改革を推進するなかで、生じたものである。その同盟休校理由書を改めて確認すると、要求の第一には「制裁会の再興」が掲げられている。つまり、この時期には「制裁会」が禁じられていたことが窺える。また、理由書には「組別の弊害」も挙げられ、成績順のクラスによって教授法や試験の難易度を変えることへの不満、最下位のクラスに所属した際の失望が記されている、さらには「発火演習運動会兎狩り等の年中行事只教師の思ふまゝにして毫も生徒の意見を容れず」と、新たな行事に対する不平を述べてもいた。



図：佐賀中学校退学処分者数の推移



「制裁会の再興」や「組別の弊害」などの主謀者の生徒による要求は、端的には旧来の学校文化への回帰を求めるものである。校長の主導のもと、運動と学業に邁進をはじめた大正期の佐賀中学校において、制裁会などは前時代の文化的遺風になりつつあった<sup>(12)</sup>。「豪傑組」のような、かつての学校では中心にあった粗暴な文化は、この時期の学校文化ではむしろ異端となり、素行に難のある主謀者のような生徒らは、その居場所が失われつつあったのではないか。つまり、大正5（1916）年の学校紛擾は、新たな学校文化との旧来の生徒文化との軋轢によって生じた、文化をめぐる闘争であったように思われる。そして、同盟休校は主謀者生徒の退学処分で帰結したのであり、これによって紛擾を惹起するような生徒文化がより希薄化し、新たな文化が一層浸透する契機になった可能性がある。

すでに述べたが、この紛擾以降、佐賀中学で学校紛擾が生じることはなかった。『佐賀県教育五十年史』は、大正後期以降の生徒を、明治期と比較しながら、次のように説明する。「往年学校騒動の際一致団結した生徒は、今日対外野球戦に選手を送り、其の応援に眠食を忘るゝやうになつて来た」（佐賀県教育会編 1927, p. 121）。この同盟休校は新旧の学校文化・生徒文化の転換点であったといえるかもしれない。

#### 4. おわりに

本稿は大正5（1916）年の佐賀中学校同盟休校を事例に、大正前期中学校の学校紛擾について、生徒文化・学校文化の観点から、その実際と背景を検討してきた。簡潔にまとめると次のようになる。

本事件は一部の不良生徒が処分を恐れて他の生徒らを扇動し、同盟休校に突入したものであった。明治期の佐賀中学校は、強い軍人志向もあり、「豪傑組」や「制裁会」など生徒間の厳格な上下関係が形成されていた。よって、上級生にはきわめて強い権威が認められ、それが既存の学校秩序への反発や学校紛擾に転化しやすかったと考えられた。しかし、そうした「ストライキ学校」は大正期に入ると、校長・千住武次郎の学校改革により、運動や学業を奨励する学校文化へと転換しはじめていた。本稿ではそれら旧来の生徒文化と新たな学校文化との軋轢が、大正5（1916）年の同盟休校として表面化したと考察した。

もちろんこの紛擾は一事例にしかすぎない。しかし、学校紛擾の包括的な理解に向けて、どのような示唆が得られたのだろうか。戦前期中等学校における学校紛擾の新聞報道件数を検証した太田（2019）によれば、明治期に比較すると、大正期前半に中学校の紛擾報道件数は著しく減少するという。それを本事例をふまえて解釈するならば、大正期に入ると各中学校には新たな学校文化が形成されるとともに、紛擾の基盤となるような旧来の生徒文化が消失していったため、となるだろう。その新たな学校文化の形成に影響を与えたのが、部活動の隆盛や競争激化に伴う進学指導の高まりなどである。もちろん追証の必要があるため、これは仮説に留めておくべきだろう。

さて、もう一つの示唆は教師生徒関係についてである。紛擾に教員として対応した下村湖人は、同年5月に雑誌『佐賀県教育』に論説を発表している。そこで次のように述べている。

茲に一人の生徒があつて何か校則を犯したかの嫌疑があるとする。取調べる。調べても中々事実を云はない。手を代へ品を代へして居るうちにとうとう事実を白状する。そこで保証人に警告を与へるなり処罰をするなりそれ相当の処罰をとる。勿論処置の如何に関らず本人に対しては何等かの訓戒を加へる。それは生徒が修身書なり何なりで百も承知の説法である。これで先づ役目は済んだ事になる。そしてそこには教育家としての深い道義の観念もなければ、義務の観念もない。先づこの形式が備つて居れば眼に見えた過失でも怠慢でもない。言ひ過ぎるか知れないが現代教育家の大多数は皆この「怠慢でない」と云ふ範囲に於て活動し、其の執りたる処置の外形に於て何等批議せらるべき点がなければそれで満足して居る様に思へる（下村 1916, p. 2）。

そして、湖人は「子弟は形式的の訓戒とか、処罰の威力とかよつて決して一寸一分たりとも向上されるものではない」（同上、p. 4）とし、明治維新前後にはみられた教育者の「哲人的態度」「人格的に徹底した教育」（同上、p. 3）の喪失を嘆いている。確かに明治期の学校紛擾の頻発によって、文部省は省令・訓令・内訓を發布して生徒の行動を取り締まり、各中学校でも生徒管理を強化して懲戒規定を増やしていった（斉藤 1995、佐藤 2005）。湖人の論説は、人格や人間性で結合していたはずの「人間的指導」の教師・生徒関係が、近代学校の成立に伴い、制度によって保証された地位と役割のみに基づく「制度的指導」の関係にとって代わられるという、ウォーラー（1957 訳書）の指摘そのままといつてよい。本稿でみたように、紛擾が一段落した大正期に新たな学校文化が創出されたとすれば、こうした教師・生徒関係の合理化はそのまま進行したのか、あるいは、実際はまた別の関係が生じたのかという問いが新たに生じてくる。稿を改めて検討する必要があるだろう。

### 〈注〉

- (1) 事例研究ではないが、市山（2015）は同盟休校時における生徒の行動様式を検討しており、当事者の視点から紛擾を再構成しようと試みている。
- (2) 『佐賀県教育五十年史 中編』の佐賀中学校「学校騒動」によれば、先の明治 21 年に加え、明治 31、40、42、45、大正 5 年にそれぞれ紛擾が発生していた（佐賀県教育会編 1927、p. 116）。なお、「外にもあつたらうが精確な調査がつかぬ」（同上）という。
- (3) 例えば、明治 40 年の学校演説会では卒業生が「昨年の紛擾。今年の紛擾。佐賀中学は学識に於て天下の名物にあらず、紛擾によつて名を得てゐます」（岩松 1907、p. 125）と、在校生に対して紛擾の多発を嘆いている。教員の回想でも「佐中名物のストライキ」（久保田 1956、p. 84）と評される。
- (4) この点、佐藤（2005、p. 233）は、「学校紛擾は母校の『不祥事』としてあつかわれ、その事実そのものの抹殺されることが、決して少なくない」と指摘する。確かに事件当時は不祥事として封印されたとしても、学校沿革史における卒業生の回想欄には、佐賀中学校の学校文化を象徴する出来事として、同盟休校がしばしば登場している。
- (5) ただし、回顧的な記述には、記憶の再現性、事実の誤認、新たな価値付けといった問題が生じるため（Berger 訳書 2007）、その取り扱いには留意したい。
- (6) さらに、紛擾の経緯を記したものとして、文部省の求めに応じて県の視学が作成した報告書が残されている（『佐賀中学校 生徒騒擾に関する報告』大正 5 年 1 月 25 日〔佐賀県公文書館所蔵〕）。また、『佐賀新聞』でも 1 月 20 日から 3 日間にわたって同盟休校を詳細に報じている。これらの資料もあわせて参照した。
- (7) なお、当時 1 年であった生徒によれば、「一、二年の下級生は参加を拒否された。三、四年達が発頭人達に追いまわられ一団となって校門を出ていくのを生徒控室の窓に登ってこわごわながら半ば、好奇心で見物して居た」（小出 1957、p. 408）という。
- (8) この日、下村虎六郎は短歌で綴った日記に、主謀者が生徒の一団を追いつ立てる様子について、「群集を羊の如く逐ひてゆく眼光れる丈ひくき子よ」（吉川編 2004、p. 64）と記している。また、川上実相院に立て籠もった生徒の姿を、「山寺の堂にこもりて燭一つともせばにぶき顔のならべり」「燭一つかこみてもだし折々はおびえし如く眼をあぐる子ら」（同上、p. 65）と詠んでいる。
- (9) 他にも別の生徒は、入学早々に新入生一同が 5 年生に呼び出され、「語気鋭く欠礼をして横着だとか貴様達は生意気だとか運動場隅のボートを壊したのは誰だなんて散々しごかれて皆ふるえ上った。それ以降上級生は先生よりも恐し」かったと、その厳しさを記している（原 1967、p. 104）。
- (10) 下村（1955a、p. 61）によれば、当時「一般から『聖人組』という冷笑的な名称で呼ばれていた」という。
- (11) 軍学校への進学傾向は明治以降も続いていた。佐賀中学校の進学動向を当時の各種統計を用いて分析した烏田（2020）によれば、明治 40 年代から昭和 10 年代に至るまで一貫して佐賀中学校の軍学校への進学者比率は、全国的にみても高かった。また、広田（1997）は、全国的には大正中期以降、陸軍士官学校への志願者が減少するものの、九州の中学校の減少傾向が緩やかであり、とりわけ一流中学の減り方が鈍かったと指摘する。佐賀中学はまさにそれに該当する。
- (12) 「警察方の干渉廃止」という要求についても、学校への警察権の導入は明治 30 年代に議論が始まっており（林 1995、p. 68）、他県での教員経験が豊富な千住校長には当然の手段という認識であった可能性もある。

## 《引用・参考文献》

- 赤司卓治, 1977, 「佐賀中学校の回顧」佐賀県立佐賀西高等学校創立百周年記念事業委員会編『栄城 創立百周年記念誌』佐賀県立佐賀西高等学校創立百周年記念事業委員会, pp. 249-250.
- Berger, Peter, 1963, *Invitation to Sociology*, Doubleday. (= 2007, 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待 普及版』新思索社)
- 福山重吉, 1941, 「思出草」佐賀県立佐賀中学校栄城会編『栄城』創立 60 周年記念号, pp. 85-87.
- 福山善次, 1941, 「二十五年前」佐賀県立佐賀中学校栄城会編『栄城』創立 60 周年記念号, pp. 110-111.
- 原和正, 1967, 「わんぱく物語」佐賀県立佐賀西高等学校創立九十周年記念事業委員会編『西高創立九十周年記念誌』佐賀県立佐賀西高等学校創立九十周年記念事業委員会, p. 104.
- 林雅代, 1995, 「近代日本の『青少年』観に関する一考察」『教育社会学研究』第 56 集, pp. 65-80.
- 広田照幸, 1997, 『陸軍将校の社会史』世織書房。
- 市山雅美, 2015, 「学校紛擾における要求実現のための生徒の行動様式」斎藤利彦編『学校文化の史的探究』東京大学出版会, pp. 97-128.
- 今泉耕吉, 1967, 「追憶」佐賀県立佐賀西高等学校創立九十周年記念事業委員会編『西高創立九十周年記念誌』佐賀県立佐賀西高等学校創立九十周年記念事業委員会, pp. 106-107.
- 伊藤彰浩, 1999, 『戦間期日本の高等教育』玉川大学出版部。
- 岩木勇作, 2020, 『近代日本学校教育の師弟関係の変容と再構築』東信堂。
- 岩松玄十, 1907, 「無題」佐賀県立栄城会編『栄城』第 28 号, pp. 124-128.
- 烏田直哉, 2020, 「旧制佐賀中学校における卒業生の進路」『東海学園大学研究紀要人文科学研究編』第 25 号, pp. 1-20.
- 木村政伸, 2021, 「新潟・三校ボートレース事件からみえる明治後期中等学校が抱える病理とその構造」『日本教育史研究』第 40 号, pp. 1-27.
- 小出憲宗, 1957, 「思い出の記」創立八十周年記念事業委員会編『佐高創立八十周年記念誌』創立八十周年記念事業委員会, pp. 407-410.
- 久保田早苗, 1956, 「気骨稜々－佐賀中学在職時代－」永杉喜輔編『一教育家の面影－下村湖人追想－』新風土会, pp. 82-84.
- 松本五平, 1967, 「思い出」佐賀県立佐賀西高等学校創立九十周年記念事業委員会編『西高創立九十周年記念誌』佐賀県立佐賀西高等学校創立九十周年記念事業委員会, pp. 113-114.
- 杜七郎, 1957, 「思い出のまに」創立八十周年記念事業委員会編『佐高創立八十周年記念誌』創立八十周年記念事業委員会, pp. 169-204.
- 永杉喜輔, 1974, 『下村湖人伝』国土社。
- 中野光, 1968, 『大正自由教育の研究』黎明書房。
- 西川豊太郎, 1941, 「野球応援の思出ところどころ」佐賀県立佐賀中学校栄城会編『栄城』創立 60 周年記念号, pp. 112-117.
- 大川内茂, 1959, 「池塘春草の夢 (二)」『新郷土』第 128 号, pp. 11-13.
- 小野雅章, 2008, 「1920 ～ 30 年代にかけての学校事件・学校事故史研究素描」日本大学教育制度研究所編『教育制度研究紀要』第 39 集, pp. 1-17.
- 太田拓紀, 2017, 「明治期中学校の学校紛擾とその発生要因」『滋賀大学教育学部紀要』第 66 号, pp. 69-80.
- 太田拓紀, 2018, 「明治後期中学校における学校紛擾と学校文化の変容」社会学研究会編『ソシオロジ』第 63 巻第 2 号, pp. 43-61.
- 太田拓紀, 2019, 「戦前期中学校における学校紛擾の変遷」日本教育社会学会第 71 回大会発表レジュメ。
- 太田拓紀, 2021, 「大正後期中学校の学校紛擾と教師・生徒関係の特質」『滋賀大学教育学部紀要』第 70 号, pp. 261-272.
- 太田一郎, 1957, 「佐中の思出」創立八十周年記念事業委員会編『佐高創立八十周年記念誌』創立八十周年記念事業委員会, pp. 127-129.
- 大武正人, 1968, 『小説・私の三好十郎伝』永田書房。
- 大園隆二郎, 2008, 「大正 4 年から 9 年の佐賀中学」三好十郎没後 50 年記念誌編集委員会編『劇作家三好十郎』書肆草茫々, pp. 212-221.
- 佐賀県教育会編, 1927, 『佐賀県教育五十年史 中編』佐賀県教育会。
- 佐賀県立佐賀西高等学校創立百周年記念事業委員会編, 1977, 『佐高創立百周年記念誌』佐賀県立佐賀西高等学校



創立百周年記念事業委員会。

斉藤利彦, 1995, 『競争と管理の学校史』東京大学出版会。

桜井厚, 1983, 「生活史研究の課題」W.I. トーマス・F. ズナニエツキ (桜井厚訳) 『生活史の社会学』御茶の水書房, pp. 243-265.

佐藤秀夫, 2005, 「学校紛擾の史的考察」佐藤秀夫『学校の文化』阿吽社, pp. 229-276.

Schütz, Alfred und Thomas Luckmann, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, UVK Verlagsgesellschaft. (= 2015, 那須壽監訳『生活世界の構造』筑摩書房)

千住武次郎, 1957, 「赴任当時の佐賀中学」創立八十周年記念事業委員会編『佐高創立八十周年記念誌』創立八十周年記念事業委員会, pp. 205-207.

下村湖人, 1955a, 「校風へのレジスタンス」亀井勝一郎編『わが青春記』三笠書房, pp. 60-63.

下村湖人, 1955b, 「私の中学時代」『中学時代』第6巻第10号, pp. 38-41.

下村虎六郎, 1916, 「教育界の人生盲」『佐賀県教育』第213号, pp. 1-4.

創立八十周年記念事業委員会編, 1957, 『佐高創立八十周年記念誌』創立八十周年記念事業委員会。

竹内洋, 1997, 『立身出世主義』日本放送出版協会。

寺崎昌男, 1971, 「明治学校史の一断面」『日本の教育史学』第14集, pp. 24-43.

筒井東衛, 1957, 「遙かなる山河遠きあの頃」創立八十周年記念事業委員会編『佐高創立八十周年記念誌』創立八十周年記念事業委員会, pp. 125-127

Waller, Willard, 1932, *The Sociology of Teaching*, John Wiley and Sons. (= 1957, 石山脩平・橋爪貞雄訳『学校集団』明治図書出版)

吉川出善編, 2004, 『下村湖人全短歌集成』池田書店。

<謝辞> 本稿を執筆するにあたって、下村湖人生家・島英彰氏より貴重な資料や情報をご提供いただきました。ここに感謝の意を表します。

<付記> 本論文は JSPS 科研費 JP19K02561 の助成を受けたものです。